映画篇

―――― 映画文学人生論

0511) タデ食う虫と作家の眼　武田泰淳 (1912-1976)
0521) ぼくの映画を見る尺度　三島由紀夫 (1923-1970
0531))映画の感情教育　安岡章太郎 (1920-2013)
0541) フランス映画紀行　池波正太郎 (1923-1990)
0551) 映画放浪記　色川武大 (1929-1989)

元来私は活動写真というものを余り好きません

昔、映画は活動写真と呼ばれていた。夏目漱石が明治四十四年八月に堺で「中味と形式」という題で講演したとき、「元来私は活動写真というものを余り好きません」と述べている。子供の教育上甚だ宜しくからなるべく遣りたくないが、それでも三度に一度は監督者として連れ出され、暑い所で鼻の頭へ汗の玉を並べて、我慢したという。

戦前の文学者の映画観は漱石と似たようなものだと思うが、戦争中に青春時代を送ったいわゆる戦中派の中には映画好きの作家がかなりいる。

映画とは何か、映画と文学の共通するところはどこで、違いはどこにあるか――などの問題について考える参考にするため、映画好きの文学者たちの随筆をいくつか読んでみた。

タデ食う虫と作家の眼　武田泰淳
ぼくが映画を見る尺度　三島由紀夫
映画の感情教育　安岡章太郎
フランス映画紀行　池波正太郎
映画放浪記　色川武大

文学史上では、武田泰淳は第一次戦後派、三島由紀夫は第二次戦後派、安岡章太郎は第三の新人に分類され、池波正太郎と色川武大は大衆小説の作家とみなされているが、この五人には少年時代

映画篇――映画文学人生論

に映画ファンだったという共通点がある。作家の感情教育へ映画が及ぼした影響を重視すれば、戦中派として一括りにしてもよいと思う。

好みは作家によって違うが、おおまかな傾向をみると、安岡章太郎と池波正太郎はフランス映画を好み、三島由紀夫はアメリカ映画の西部劇を好み、日本のヤクザ映画もよく観ている。武田泰淳と色川武大は国籍を問わず何でも観ているが、武田は宗教映画、色川はピカレスク（悪漢）映画への好みが目立つ。

戦中派の映画ファンにとって第二次世界大戦中のアメリカは日本の敵国で、日本国内ではアメリカ映画を観る機会に恵まれなかった。『風と共に去りぬ』『駅馬車』『カサブランカ』などの名作でも日本人が観たのは戦後になってからだ。

一方、フランスは一九四〇年六月、ドイツに降伏して、ヴィシー政府により日本の友好国になったため、フランス映画は『外人部隊』『望郷』のように自由主義的な傾向の映画も繰り返し上映された。ただし、戦争末期にはフランス映画も禁止されたし、検閲で上映不許可の作品もあった。

いずれにしても、映画が文学者の感情教育に及ぼす役割は無視できない。活動写真が好きではないという漱石も落語や芝居は好んだ。情（f）を理想として働かせる人が文芸家であると漱石は心得ていた。

無人島の天子とならば涼しかろ　漱石